

館林キリスト教会 デボーションノート（2007年）

10月 1日 今日の通読箇所 列王紀下 10章1～17

「激烈なクーデター」

将軍エヒウは（今はもうイスラエル王）預言者エリヤの感化を強く受けて、その預言のとおり、アハブ王家一族を滅ぼし、イスラエルからバアル礼拝の悪風を根絶しようとした。しかしエヒウは、宗教家であるよりも革命家で、預言者ではなく軍人である。そのやり方は敏速で徹底的だ。サマリヤ市民を脅迫してアハブの七十人の子を殺させ、かごにつめて届けて来たその首を、城門の前にふたつの山に積み上げる。更に自分もエズレル・サマリヤなどを搜索し、関係者は一人も逃さない決意だ。

10月 2日 今日の通読箇所 列王紀下 10章18～31

「だまし打ち」

一方エルサレムでは、エヒウはバアル礼拝の祭司、預言者、信者などを、礼拝のためだといつわって神殿に集めてみな殺しにする。言わばだまし打ちである。これは、いかにバアル礼拝がアハブ王家の保護のもとに根強く維持されていたかを物語っていて、エヒウの取った思い切った手段も止むを得なかったと思わせる。それとともに、サマリヤ、エズレルの虐殺がすでに行なわれているにもかかわらず、彼らが何も知らずに集まって来たのを見れば、エヒウのやり方がいかに機敏であったかを察する足りるのである。エヒウのクーデターは残酷だ。しかしかってアハブ王とイゼベルは、国民にバアル礼拝を強制し、これに従わぬ者を、国王の力を動員し、組織的に年数をかけて、徹底的に殺した。今度殺されたバアル礼拝の関係者は、その悪政に便乗して時を得た人たちであって見れば、彼らがエヒウによってこういう裁きにあったのも、止むを得なかったと思われる。

10月 3日 今日の通読箇所 列王紀下 11章1～12

「イゼベルの娘」

ユダの王アハジヤは、このイスラエルのクーデターさわぎのまっ最中に、イスラエルの首都サマリヤを訪問中であつたが、クーデターのまきぞえを食って死んだ。アハジヤ王の母アタリヤは、実はアハブ王とイゼベルの間に生まれた王女で、アハジヤ王の父、つまり先王ヨラム（エヒウに殺されたイスラエル王ヨラムとは別人）がアハブ王との友好の気分で結婚した婦人だった。彼女はいま、イスラエルで、エヒウによってアハブ王家、つまり彼女の実家の一族がみな殺しにされたのを知った。同時に自分のむすこ、アハジヤ王もそこで死んでしま

ったのを知ったのである。あせった彼女は、せめてユダ王国を完全に掌握して、ここに、アハブ王家の理想、すなわちバアル礼拝を維持し鼓吹しようと計画した。そのために、アハジヤ王の死をチャンスとし、これまた一種のクーデターを起こして、王一族をみな殺しにし、自分がユダの王権を掌握した。さすがイゼベルの娘だ。

10月 4日 今日の通読箇所 列王紀下 11章13～21

「エホヤダの宗教改革」

アタリヤ女王の数年にわたる悪政の間、祭司エホヤダは、アハジヤ王の遺児を神殿にかくまって守りとおした。この遺児は、あのクーデターの時、叔母エホシバと乳母との手によって、かろうじて救い出されたのだった。今、この王子が七才になったので、エホヤダは祭司たちや近衛兵など、アタリヤの悪政に反対の人々と打ち合わせて、今度はクーデターを起して成功し、アタリヤは殺された。エホヤダの場合は、イスラエルのエヒウとは違って、もともと敬虔な人物だったから、ただちにユダに宗教改革が行なわれ、ようやくユダ王国は、アハブ王家と、バアル礼拝の悪影響をまぬがれることができたのだった。

10月 5日 今日の通読箇所 列王紀下 12章1～18

「神殿の会計」

ここは旧約聖書にはめずらしい神殿の会計に関する記事である。みんながきちんと献金をしているのに、なかなか神殿の修復工事が実行されない。よくしらべてみると、これらの献金が、祭司たちの生活費として使われてしまうらしいことがわかった。そこで、献金を祭司たちに直接わたすことを中止して、別に会計係を選び会計事務を確立した。そして祭司には生活費として至当な部分をわたし、大部分を神殿修理費の支払いに当てることにしたので、神殿修理の工事は進展した。そればかりではない。注意深い会計の結果生じた余剰金を貯金しておいたのが、後に賠償金の一部として役立って、その時仕掛けられた戦争を回避することができたと言う。

10月 6日 今日の通読箇所 テサロニケ人への第二の手紙 1：1～6

「信仰、愛、忍耐」

このテサロニケ第二の手紙は、第一の手紙を書いたから半年位あとに書かれたものです。再臨問題をめぐって、教会内に生じた誤解を解き、混乱を静め、正しい再臨信仰に導くことを目的としています。この手紙で、挨拶を書き終えたパウロは、テサロニケの教会の人々に感謝とその理由を述べています。それは、彼らの「信仰が大いに成長し」、「ひとりびとりの愛が、お互いの間に増し加わって」いたからです。またパウロは、彼らが迫害と患難とのただ中で示してい

る「忍耐と信仰につき、神の諸教会に対してあなたがたを誇りとしている」と賞賛しています。彼らは、多くの人々が福音を聞いて初めは喜んで受け入れるが、何か困難に出会うとすぐにつまずいてしまう中で、人々の中傷や非難に負けないで、神への信仰に堅く立ち続けていたのです。

10月 7日 今日に通読箇所 テサロニケ人への第二の手紙 1：6～12
「裁きと報い」

テサロニケ教会の人々は「迫害と患難とのただ中」で忍耐と信仰を持ち続け主に従っていました。これはパウロの喜び、誇りでした。彼らの今の苦しみは、単に苦しみで終わりません。主イエス様が、再び天から来られる時決着がつくのです。主イエス様は、クリスマスにおさな子として、この地上に来て下さり、全ての人を招く救い主として、全ての人を愛して十字架でお死に下さいました。しかし、主イエス様が再びこの地上においでになる再臨の時は、厳しい裁き主として来られるのです。同時に、主を信じる人たちのためには「休息」という報いを用意して下さるのです。苦闘から全く解放され、安息が与えられるのです。その時まで「いよいよ召しにかなう者とされ、良い志を持って信仰の働きが前進するように」とパウロは祈っています。

10月 8日 今日に通読箇所 テサロニケ人への第二の手紙 2：1～7
「主の日の前兆」

「主の日」とは、主イエス様が再び来られる日、即ち再臨のことです。この日はクリスチャンが主のみもとに集められる時です。イエス様もオリブ談話で、その日「四方からその選民を呼び集める」(マタイ 24:31)と言い、また主の日については「その日、その時がいつであるかは誰も知りません。……ただ父だけが知っておられる」(マタイ 24:36)と教えました。パウロも「主の日」がすでに来たと言って惑わす者があっても、心を動かされたり慌てたりしてはいけないと戒めています。なぜなら「主の日」が来る前には、「背教」が起こり、「不法の者」が現れるからです。「背教」とは、神に反逆することであり、「不法な者」とは、反キリストのことです。これらが現実となる時、主の日が来るのです。

10月 9日 今日に通読箇所 テサロニケ人への第二の手紙 2：3～12
「不法の者」

主の再臨の前に「不法の者」すなわち反キリストが現れるとあります。「不法の者」は神に反逆し、自分が神であると宣言します。迫害と同時に、福音の真理に反して教えるので「だまされてはいけない」(3節)とあります。「不法の者」はサタンの働きにより、人を欺く種々のみせかけの奇跡と偽りの不思議、悪い欺きの誘惑を行います。これによって滅びる人々がありますが、それは彼らが

「真理を歓迎し真理を愛し真理に従うこと」を拒絶し、不義を積極的に喜び反逆した為です。この不法の秘密の力、神に敵対する悪の力はすでに働いていますが、今は「不法の者」が出現するのを阻止しているものがあります。それが取り除かれると「不法の者」が現れます。しかし再臨の時、主に滅ぼされるのです。

10月10日 今日の通読箇所 テサロニケ人への第二の手紙 2：13～17
「選びと恵み」

ここでパウロは一変して、神様に逆らう人たちの恐ろしい裁きに比べ、主に愛されていることがいかに祝福であるかを記しています。そしてパウロは、彼らの信仰の成長を喜び、「あなたがたのことを神に感謝せずにはおられない」と書いたのです。その理由の1つは、13節の「神があなたがたを初めから選んで」下さったことです。選ばれるのに相応しくない者が選ばれたということは、どんなに大きな祝福であり、光栄なことでしょう。どんなに財をささげても、自力でがんばっても救われません。救いの道は、ただ神の選びと恵みにあるからです。そこでパウロは、これらのことを覚えつつ、彼の話した言葉、書いた手紙によって、すなわち、みことばに堅く立って生きることを強く勧めたのです。

10月11日 今日の通読箇所 テサロニケ人への第二の手紙 3：1～8
「祈ってください」

偉大な伝道者パウロ先生が「祈ってほしい」と求めています。パウロは迫害と困難で体の傷跡は痛々しかったです。心は一点に集中しその願いは「主の言葉がここでも急速に広まり、あがめられるように」ということでした。彼はこの願いを携えて、いつも次の伝道地に向かったことでしょう。もう一つは伝道に集中できるよう「不都合な悪人から救われるように」ということでした。不当な攻撃的な悪意を持った人々から守られるよう願っています。主を信じる協力的な人々だけでなく、積極的に反対し攻撃する人々に出会うことも多かったのです。何故ならすべての人が信仰を持っているわけではないからです。伝道の最前線で、パウロは祈りの助けをどんなに必要としていたことでしょう。

10月12日 今日の通読箇所 テサロニケ人への第二の手紙 3：6～18
「勤勉な生活の勧め」

テサロニケ教会には、怠惰な生活、勤勉な生活をしている二種類の人々がいました。パウロは怠惰な締めりのない生活を送っている人々に「静かに働いて自分で得たパンを食べるように」(12節)と命じ、忠実な信仰生活を送っている人々には「たゆまずに良い働きをなささい」(13節)と勧めました。宗教改革者カルヴァンは晩年、病気の身でありながら、彼がジュネーブの教会の教師、神

学教師としての労苦の多い働きを続けたのは彼の勤勉によります。小林牧師は、主治医橋田先生によると片肺同然でした。その先生が教会の仕事に最後まで従事されたのも私たちに勧める勤勉の生活のお手本だと思います。

10月13日 今日に通読箇所 詩篇 第25篇1～16

「わなに掛った動物」[15節]わなや網に掛った動物の、恨むようなあわれみを乞うような目つきは独特のものだ。それを構わず「つぶつぶと料理した」むごたらしさが忘れられず、出家した話しさもある。人生にもわながあって、そんな時はもがけばもがくほど、絡みつき締つけられてどうにもならない。ダビデはそういう時こそ主を見上げ主に祈った。「わなの中から主を見上げるダビデの目」は主のあわれみを動かし、彼はしばしばそこからも救われたのだ。

10月14日 今日に通読箇所 詩篇 第26篇1～12

「教会を愛する聖徒」

誰にでも当てはまって分りやすいクリスチャン生活の秘訣は、忠実に集會に出席することです。反対にどんな天才でも、集會を休んでは信仰生活は成り立ちません。[8節]にダビデが言っているように、主の臨在と主の栄光のある場所、すなわち教会を愛するものは幸いです。詩篇 122 篇にも「エルサレムのために安きを祈れ。エルサレムを愛するものは栄ゆべし」(文語訳 とあるとおりです。

10月15日 今日に通読箇所 詩篇 第27篇1～14

「主の顔をたずねる」

「あなたは仰せられました『わが顔を尋ね求めよ』と[8節]」クリスチャンでも、時にはお祈りしながら、何だか神さまがそっぽを向いていらっしゃるようで心細く、実感も感激もない祈りになってしまうことがある。これは本当に寂しいものだ。何かみ心に適わぬことがあったのか。自分の信仰が弱いのか。真剣にみ言葉を読み、また考えつつ、根気よく主のみ顔を求める。そしてやがて主とのさらに深いまじわりに導かれてゆく。クリスチャンのそういう経験も、また大きな祝福です。

10月16日 今日に通読箇所 詩篇 第28篇1～9

「苦しみの詩」

詩篇は詩歌を集めた聖書である。歌にもいろいろあって、鼻歌などご機嫌のいい時に出てくる。しかし詩篇には大体苦しい時の歌が多い。あこや貝の中に異物が入ると、特殊な分泌物が出て、だんだんその異物を包みこんでゆく。これは異物の痛さに泣く貝の涙だといわれる。その結果あの美しい真珠ができるのである。クリスチャンの試みも、美しい祈りと歌を生み、多くの悲しむ人の

ために、すばらしい教えと慰めと励ましになってゆく。

10月17日 今日の通読箇所 詩篇 第29篇1～11

「雷電と暴風」

これは激しい雷電、豪雨、大風、洪水の描写だ。美しく静かな自然界に神の愛を感じるとしたら、嵐に神の力と権威を感じるのは当然である。ロマ書にも「神の慈愛と、その峻厳とを見よ」とあるとおりだ。しかし、雷雲、洪水の上に座したもうのは、救い主なる神である。イスラエル人がエジプトを出たとき、またカナン人と戦った時、神は大嵐をもって彼等を助けられた。「主は洪水の上に座し、その民に力を与え、祝福される[10.11節]」のは本当だ。

10月18日 今日の通読箇所 詩篇 第30篇1～12

「奉仕のための生命」

「わたしが墓に下るならば、あなたのまことをのべ伝えるでしょうか。主よわたしの助けとなってください[9.10節]」使徒パウロは決して死を恐れなかった。むしろ「この世を離れて主とともにある方がいい」と言っている。しかし「伝道牧会の奉仕が必要ならばなお生きながらえることを祈る」というのがパウロの心境だった。自分も戦時中、かつ血をくり返しながらかつ、そんな祈りを捧げていたのを思い出す。凡人の生死超越の経験だ。

10月19日 今日の通読箇所 詩篇 第31篇1～16

「憂いと嘆き」

牧師が儀式に使う「祈とう書」というものがある。公式の祈りに不適確な表現や遺漏がないように祈りを助ける、つまり祈りの教書であるが、詩篇にはそういう性格もある。苦しい時、困った時、祈る力もない時、静まって神の前にこの詩篇を朗読するなら、これはすばらしい祈りの代弁者である。そして詩篇にうながされて、次第に自分の祈りが注ぎ出されてくる。これもまた知る人ぞ知る、詩篇のすばらしい効用の一つです。

10月20日 今日の通読箇所 詩篇 第32篇1～11

「悔改めの詩篇」

ダビデはバテシバ事件後の深刻な悔い改めの詩を、詩篇の中に七つ残している。これはその第一だ。一時の迷いとはいえさすがのダビデも、当時はバテシバに前後不覚に熱中していた。そのバテシバとの同棲生活の間、愛欲と快樂のただなかであって、一面ダビデの良心はこれ程の苦しみに悩んでいたのだ。しかし真実な悔改めと告白によって、その罪を許されたとき、彼は「主に罪を許された者の幸い」を、この詩の中に歌ったのである。

10月21日 今日の通読箇所 詩篇 第33篇1～22

「賛美の詩篇」

歌謡曲などに出てくる言葉の統計を見ると、涙、別れ、雨、などが絶対的に多く、これは古今集の昔から変わらない。希望に満ちた歌などはそらぞらしくて人心に合わず、いつの時代でも流行らないようだ。いかに悲哀が人間の心の基調をなしているかが察せられる。反対に賛美歌の基調は、救われ、主にあって生きる者の幸福、喜びである。ここに「正しき者よ主によって喜べ。賛美は直き者にふさわしい」とある通りだが、本当にすばらしい。

10月22日 今日の通読箇所 詩篇 第34篇1～22

「浮浪人の集団」

ダビデは理由なくサウル王に追われ、国中に身の置きどころのないはめになった。ところがサウル王の悪政のもとで立場を持たない不平分子が、続々と集ってダビデに身を寄せ、ついに四、五百名の集団となったのである。彼らは自暴自棄のアウトロー暴力集団になる恐れもあったのだが、ダビデはよく彼らを指導し、信仰的で勇敢で忠誠な、将来のダビデ親衛隊を養成することができた。これも彼の信仰と祈りと人格の感化によるのである。この詩はその消息を伝える、貴重な一篇だ。

10月23日 今日の通読箇所 詩篇 第35篇1～17

「悪人からの保護」

われわれは世にある間、時には悪い人の攻撃や誘惑や策略に出会う。われわれは人を裁き敵対することを好まないが、しかしそういう場合に、人の攻撃や策略に陥ることから守られなければならないのも事実だ。ダビデは半生を、サウル王の攻撃と策略に悩まされてすごした。その他の敵も多く、また自分の王子アブサロムにさえ命を狙われた。それを思えば、ダビデにこの厳しい真剣な祈りの詩篇があったのも、よく理解できるのである。

10月24日 今日の通読箇所 詩篇 第36篇1～12

「神の恵みの姿」

天地にあふるる神の恵みは、種々の物にたとえられるが、ここにも親鳥の翼、泉、光などの言葉が出てくる。母鳥がその翼の下に雛鳥をはぐくみ、攻撃するものがあればけたたましく抵抗する姿。砂漠の国で、疲れた旅人の渴きを癒す泉。昔の時代の心細い闇夜に、家族の団欒を照らし、暗い道も迷わず進ませる光。これらの神の恵みを求めずには、人は一日も生きられないのだ。まことに「主の恵みは人を生かす」のである。

10月25日 今日の通読箇所 詩篇 第37篇1～17

「信仰への説得」

正しい者が悪を行なう者のために悩み、彼らを妬むとはどういうことだろう。信仰と、いわゆる「悪い奴ほどよく眠る」現実との矛盾に苦しむ結果だろう。「おのが道を歩いて栄える者のゆえに心を悩ますな」とはその意味である。ここではそんな不信仰に誘われないように、ダビデは言葉を尽して説得する、彼は人を説得するのか、あるいは自分を説得するのか。この場合、真の説得者はダビデなのか、それとも実は神ご自身なのか。

10月26日 今日の通読箇所 詩篇 第37篇16～26

「人の歩み」

[23節]に「人の歩みは、主によって定められる。主はその行く道を喜ばれる」とあるが、人間は「人の歩みは自分が定める。その行く道は自分が喜びたい」と考えている。しかしなかなかそううまくゆかないので、あせったり、悩んだりするのだ。しかし私たちは神さまに祈り、導きを求めながら、神さまに喜ばれているという確信をもつ、このみことばのような人生をおくりたいものです。それがまた、我々の幸福にもつながるのです。

10月27日 今日の通読箇所 詩篇 第38篇1～22

「謙遜の詩篇」

これも「ダビデの悔改めの詩篇」の一つといわれる。ダビデは、主から試みを受け、また人から憎嫉、攻撃を受けて悩むことも多かった。その時、彼は主に訴え人をののしるよりも、過去の恐ろしい自分の罪を思い、悲しんだのである。自分の罪を思えば、どんな取り扱いでも安んじて受けられる。もっとひどい目に遭わされないのが、それが神の哀れみなのだ。この謙遜こそ、彼が常に主の祝福の中に止まることのできた秘訣だった。

10月28日 今日の通読箇所 詩篇 第39篇1～13

「セラ（沈黙）」

詩篇は礼拝に歌った賛美歌だ。だから曲や調子の指定や、時には歌手の指示もある。この歌はエドトンが独唱した。声はバリトンかどうか。セラという言葉が三ヶ所にあるが、これは沈黙の意味である。歌も伴奏もここでしばらく沈黙する。何のためか。歌の深い意味を考え、心と感情に沈潜させるためだ。そして神の声を聞くためだ。人間の罪と、短くはかない人生と、神のあわれみを祈り歌うこの詩篇には、時々セラはとても大切だ。

10月29日 今日の通読箇所 詩篇 第40篇1～17

「キリストの祈り」

詩篇は賛美歌集であると共に、祈りの模範、祈りの文集、つまり「祈とう書」です。詩篇を自分の祈りとして読むのはすばらしい祝福です。けれどもそうしているうちに「これはキリストの祈りだ。キリストだけが、この祈りを心から献げることができたのだ」と感ずることがしばしばあります。[6～8節]はその一つですが、この数節はその意味で[ヘブル 10:5～7節]にも引用されています。

10月30日 今日の通読箇所 詩篇 第41篇1～13

「悩みの日の歌」

人生には「悩みの日」がある。その中でこの詩人は[1～3節]の信仰告白を唱え、また、[4節]の祈りを捧げる。日頃から彼の祝福を妬み憎む者は、彼の死と滅亡を期待し「あいつももうだめだ」などと言いふらし、様子を見にきたり、おためごかしを言いつつ親友を裏切る[5～9節]。しかし詩人は信仰の祈りを止めない。主は必ず彼を助け、敵を見返させてくださると信じている[10～13節]これもクリスチャン人生の一場面です。

10月31日 今日の通読箇所 詩篇 第42篇1～11

「信仰の自問自答」

42篇43篇は本来一つの詩篇だと思う。43篇にタイトルがなく、「わが魂よ、何ゆえうなだれるのか」という繰り返しが見える、などがその理由だ。詩人はここで三回も同じ言葉で自分の魂を激励している。「なぜうなだれるのか。わたしにはなお神の助けがある。思い乱れていないで神を持ち望もう。やがて試練から解放されて神を賛美するようになる」と。信仰の自問自答、自分の魂の激励。本当にすばらしいことだ。